

編集後記

『言語文化』第30号をお届けする。今号も、言語文化研究所の旺盛な活動を反映した充実した内容となった。

まず第一特集「植物を描く／植物で描く」は、大原まゆみ氏（芸術学科教授）企画により二〇一一年度十二月二日に行われたシンポジウムに基づくものであり、ディスカッションの記録を含めて当日の内容を伝えている。「植物の造形表現についてドイツ語圏の美術史を専門とする研究者が集まり、互いの得意分野を切り口として、この地域では植物をいかに造形化してきたか、また植物造形を通じて何を伝えようとしてきたかを改めて問い、植物造形の可能性について考える」試みに参加いただいた方々については、特集の中の大原氏による紹介をご覧いただきたい。

つぎに第二特集「ケージとシェーンベルク——ジョン・ケージ生誕百年記念」は、樋口隆一氏（芸術学科教授）発案による五月十九日のシンポジウムによるものである。セヴリン・ネフ氏、ジョエル・フエイギン氏を始めとする参加・執筆の方々の紹介は、特集中の樋口教授によるページをご参照いただきたい。

＊

そのほか一二年度の企画としては、まず斉藤綾子氏（芸術学科教授）が組織した大規模な国際シンポジウム「一九六〇～七〇年代日本映画と世界——どのように見られ、語られたか」を、十一月十日に行った。その時期の日本映画がどのようにに世界で受容され語られてきたのかを、「北米、欧州、アジア、ラテンアメリカといった大陸を越えた各国から研究者が一同し」、「世界規模で把握、検証する」貴重な試みであった。

また、ベートーヴェン・アルヒーフ（資料館）所長エルンスト・ヘルトリヒ博士による「ベートーヴェン連続講演会」が、

十一月十九日から十二月十三日にかけて、樋口教授司会のもとで四回行われた。

さらに音楽の催しとして、前年に続き寺本圭佑氏（本学非常勤講師）企画による「ケルティック・クリスマス」を、十二月六日に行うことができた。これは「ウェールズ語の挨拶などを学び、ウェールズ語のクリスマスソングを歌うワークショップ」と、「アイリッシュ・ハーブ、フィドル、クラシックギター、歌によるウェールズ、アイルランド、スコットランドの音楽」演奏からなるものである。

＊

他方、特集以外の寄稿のうち、岡本章氏（芸術学科教授）による「現代能『春と修羅』上演と討議」とその「上演台本」は、二〇一一年度の研究所企画として十月八日に行われた舞台上演と討議の記録である。宮沢賢治のことばの断片の再構成による現代能の試みを、この誌上に紹介できることは喜ばしい。

スーザン・モワット氏の寄稿は、同じく二〇一一年度の研究所企画として一二

年の二月十四・十六日に行われた、詩人
ポール・ハラ氏（英文学科准教授）の詩
作品を出発点とする詩と美術と音楽の
共同作業、『Interrupted Landing』のうち、
美術家モワット氏（Edinburgh College of
Art、Intermedia Art Department 講師）の
講演内容を改めて原稿化していただいた
ものである。その試みでは、モワット氏
のビデオ作品と、ポール・ヘンダーソン
氏の音楽演奏と、ハラ氏の詩作品（およ

び富山によるその翻訳詩）の朗読が組み
合わされた。

また、末永理恵子氏と森本美恵子氏に
よる「日本近代音楽館所蔵資料紹介（一）
大田黒元雄文庫収蔵 ドビュッシー『ペ
レアスとメリザンド』初版スコアをめぐ
つて」は、貴重な資料発掘の記録である。
両氏は、本学図書館付属の日本近代音楽
館音楽司書である。

生田康夫氏による『イーリアス』に

おける怒り・再考」は、本研究所におけ
る多年にわたる「ホメロス輪読会」の成
果のひとつである。

*

その「ホメロス輪読会」を始めとして、
研究所では二年度もこれまでと同様に、
「記号哲学研究会」、「読む短歌・詠む短
歌」、「タイ語講座」などの研究会・読書
会の活動を着実に続けた。

（富山英俊）